

社会言語学の「社会」について

On 'Society' in Sociolinguistics

太 田 一 郎

1. はじめに

社会言語学の研究は、言語変異、ことばの民族誌、地域や社会集団の方言、相互行為や会話分析などさまざまな関心をもって遂行されてきたが、ゆるやかには「ことばを話すということを社会との関係でとらえる言語学の一分野」と表現することができる。¹しかしながら、そもそも「ことば」と「社会」をどのように定義するかはあまり簡単ではない。一般に「言語」は地域や民族などある種の集団に共有される「ことば」と認識されているが、近年には、ひとりの話者がある場面で複数の言語を同時に使うメトロリンガリズム（尾辻 2016）のような例が示されることもあり、「言語」という概念がどこまで有効なのかという問題があらためて突きつけられている。「話す」ということを考えれば、ことばの問題はより個人を対象とした研究へと向かうことが求められているとも言える。

伝統的方言学の研究においても、外住歴のない地域生えぬき話者のことばがその地域の言語を代表していたので、研究の枠組みがどうあれ、分析の対象は実は個人のことばであったのも事実である。すなわち、個人のことばを通してしか方言の姿を描くことはできなかったのだが、個人のことば（とその使用）に見られるさまざまな特徴は、集団の存在を前提とする「地域語」や「社会集団語」として概念化されてきた。

しかしながら、特に2000年代以降の言語変異の社会言語学的研究 (variationist sociolinguistics, 以下「言語変異研究」と呼ぶ) においては、個人話者の主体的な言語使用において言語変異の果たす役割に注目が集まっている。人びとの社会的位置づけが地域や階層などの社会集団に固定されていた時代とはちがひ、現代社会では人びとの地理的、社会的移動性が大きく高まった。そのため、個人話者は自らを流動的な社会状況にどのように位置づけていくかという問題に常に向き合うことを求められるようになり、話者たちは「話す」ことによって「社会」を自らの中に内在化させ、また外部の「社会」と対峙していく傾向が強まっていると考えられる。

本稿は、このような「話す」ことの変化を背景に、近年盛んな社会音声学の研究を参照して、話すことと社会の関係をとらえる社会言語学の議論を整理しておきたい。

2. 言語変異研究の「社会」との向き合い方

Labov (1972a) に代表される言語変異研究は、歴史言語学的関心から、進行中の言語変化を言語内および言語外要因が変異形の生起に及ぼす因果関係のモデルによって捉えることを試みてきた。言語変異の研究には、Eckert (2012) が 'three waves' と呼ぶ三つのトレンドがある。第一の波とは、

¹ ここでの「話す」には手話などの非音声言語や言語景観のような街中に置かれたことばも含めて考えている。「ことばの使用」と言うこともできるかもしれないが、本稿は音声言語を例に論じているので、さまざまなかたちで「ことばを発する」ことを「話す」と呼んでおくことにする。

Labov (1966)のNew York, Trudgill (1974)のNorwich, Hibiya (1988)のTokyoでの成果などに見られるように、社会調査の手法を用いて言語変数と社会変数(社会カテゴリー)の相関によって言語と社会の関係を探えようとするものである。この研究トレンドでは、言語変数と言語外の社会学的カテゴリー(社会経済階級、性、民族、年齢など)の間には幅広い相関が存在し、そのような相関は話すことに固有の変異の秩序性と言語変化のメカニズムを説明するために重要であることが示された(Weinreich, Labov & Herzog 1968)。

しかしながら、Eckert (2016)が指摘するように、社会カテゴリーは必ずしも自明のものではなく、何らかの抽象化を経たものである。たとえば、いつの時代の「女性」も社会的に同じ存在としてとらえることはむずかしいし、いわゆる「見かけ上の時間」(高野 2012: 33)による言語変化のモデルの理論的基盤である「年齢」についても、1960年の60歳と2020年の60歳はことばとの関わりにおいて同じ意味をもつかどうかはわからない。このような問題は、話者を静的な社会カテゴリーにもとづく社会的属性の束として存在するものとみなすことに起因する。研究の手法として人びとを何らかの規準に基づき分類することは必要かもしれない。しかしながら、社会カテゴリーは対象となる時代や地域、人びとの意識などさまざまな周辺の状況や環境との関わりから独立していることはあり得ない。第一の波の研究は、抽象化された社会カテゴリーと言語変異の関係を描き出して一定の成果を上げたものの、社会言語学は単に「相関を求めるだけのもの」という誤解と偏見をもたらす結果となったのも事実である(Milroy 1986)。また話者たちが無意識で自然な状態で使うことばとして概念化された「日常語(vernacular)」は、変異の観察にもっとも適したものと仮定され、その確認は「一話者内に見られる場面や状況、発話意図に応じたことばの使い分け」(高野2012: 248-249)である「スタイル」という概念を利用して行われた。しかしながら、第一の波では、スタイルは「話者のことばへの注意の度合い」を示す言語外要因として、その一面が極度に単純化されたかたちで説明モデルに組み込まれただけであった。

第二の波においては、参与観察などによるエスノグラフィー調査により得られた情報をもとに、話者の社会カテゴリーは固定されたものではなく、むしろ地域社会での社会生活を通じてカテゴリーへの帰属が交渉されるものと解釈された。この研究トレンドにおいてもスタイルが非常に重要な役割を果たす。第二の波では、Giles and Coupland (1991)のspeech accommodationやBell (1984)のaudience designなどの変異の使用に関する理論の発展を背景に、スタイルは話者の「反応的(responsive)」または「主導的(initiative)」な行為によるものと見なされた。代表的な研究としては、Labov (1972b)のNew YorkのAAVE, Milroy (1980)のBelfast, Cheshire (1982)のReadingの研究などを挙げることができる。これらの研究では、青少年や地域住民たちの社会実践を通して得られた言語データの分析から、集団のコミュニケーションネットワークやその結果生じる言語イデオロギー(言語の構造と使用に関する一連の信念、態度、価値観など)を背景として、コミュニケーションの文脈的要因の集合に対応して姿を変える、局所的に構築されたダイナミックな実体としてのスタイルの在りようが描き出された(Ota and Takano, forthcoming)。このように第二の波における「社会」は、結果的には社会カテゴリーと変異の使用との相関に着目しても、日常生活の局面における社会実践を通じてコミュニティに参加するという話者の主体的な行動が社会集団(カテゴリー)への帰

属を表すという点において、社会カテゴリーを所与のものとする第一の波とは大きく異なっている。しかしながら、第二の波においても、社会カテゴリーにおいて描き出される「社会」は結果的には「静的なもの」としてとらえられていた。Eckert (1989: 265) は「性 (sex)」という社会カテゴリーの複雑さを次のように述べている。

In other words, category membership is more salient to members of one sex than the other; girls are asserting their category identities through language more than are the boys.

言いかえれば、一方の性のメンバーにとってはもう一方の性のメンバーよりもカテゴリーに属することがより重要なのである。女子は男子よりも、言語を通じてカテゴリーによるアイデンティティを主張しているのである。

エスノグラフィーの視点によって、せっかく日常の実践を通して社会とことばのつながりを見つけ出すことができるのに、結果的に「性」という静的な社会カテゴリーのもとに取り込まれてしまうことで、カテゴリー内部の差異は見えないものになってしまうのである。そうすると、コミュニティにおけるカテゴリーの意味が異なることは十分考慮されないまま理論化される危険性が生じる。このような問題から、研究の関心はカテゴリー間の変異から個人内の変異へと向けられるようになり、第三の波へとつながっていく。

第三の波は、変異を通じて構築されるスタイルの実践と、それによって生じる社会的意味を組み込んだ言語使用のモデルを示すことに強い関心をおく。その理論構築は、指標性や言語イデオロギーなど、記号論的言語人類学の概念に深く根ざしている。スタイル実践においては、話者は主体として与えられた指標の場における特定の変異形 (variant) の指標的価値を利用して、自らのスタンスを表示し、ペルソナを構築する (Ota and Takano, forthcoming)。Hall-Lew et al. (2021: 3) は社会的意味を次のように定義する。

Social meaning is the set of inferences that can be drawn on the basis of how language is used in a specific situation. That set of inferences may be linked to the pragmatic function of the utterance itself.

社会的意味とは、特定の状況において言語がどのように使用されるかに基づいて導かれる推論のセットである。その推論のセットは、発話自体の語用論的機能と結びついていると思われる。

またEckert (2019: 769) は、社会的意味と言語実践の関係、および社会言語学的変異に備わる指標性のリソースとしての特性を次のようにのべる。

My main point ... is that social meaning is built into linguistic practice at every level of the linguistic system, and that sociolinguistic variation contributes a purely performative, subtle, speaker-indexical resource, ranging from social category membership to momentary affective states.

主な論点は、… 社会的な意味が言語システムのあらゆるレベルで言語実践に組み込まれてお

り、また社会言語学的変異は、社会的カテゴリーの成員性から瞬間的な感情の状態までにわたる、純粋に遂行的で繊細な、話者を指標する資源を提供するということである。

スタイル構築は話者の指標行為であり、それはすなわち自分自身を言語イデオロギーに媒介されたスタイル実践をとおして社会的風景の中に位置づけることである (Eckert 2012: 94)。すなわち、このような話者主導のスタイル実践を通して話者が表出する人物像に「社会」は反映されると考えられる。

以上述べたように、変異理論においては、第一の波から第三の波へと発展を遂げるにしたがい、その研究の関心は言語変化から言語実践へとシフトし (Starr 2021: 315)、社会的意味とスタイルの関係が議論の中心的なトピックとなった。

3. 社会音声学の「社会」

これまでの変異理論研究においては、音声面の変異が多く取り上げられてきたが、変異が生じる言語変数 (linguistic variable) は、理論的には言語体系の中の「構造物」として取り扱われた (Chambers 2003)。たとえば、Labov (1972a) の New York の r 音の有無や Hibiya (1988) の東京のガ行音の鼻音／破裂音の異なりなどは、体系的構造物である音素の現れ方の違い (異音) について論じたものである。その意味ではこれらは音韻論の議論であり、後述の声質のように、微細な音響的差異への関心に向けた研究はあまり見られない。より音声学的な議論にならなかった理由はいくつかあるだろうが、そのひとつとして想像できるのは、当時の録音環境や分析技術では緻密な音響的な分析を行うことは難しかったということである。

しかしながら近年は録音・録画やPCを利用した分析の技術が身近になり、音響音声学的な方法で社会言語学的変異の分析を行う研究は社会音声学 (sociophonetics) と呼ばれている。社会音声学の特徴を Kendall and Firdland (2021: 4) は以下のように述べる。

The initial research techniques of sociophonetics were drawn (and further developed) from those in acoustic phonetics, with the key differences arising from the emphases on social factors, like speakers' genders, ages, and ethnicities, their group orientations, the dynamics of interpersonal interactions, and the like. ... sociophonetic research, like many other areas in sociolinguistics, takes as its foundation everyday speech and/or speech embedded in social contexts.

社会音声学の初期の研究手法は、音響音声学の研究手法から導かれ、さらに発展したものである。重要な違いは、話者のジェンダー、年齢、民族性、集団の指向、対人関係のダイナミクスなど、社会的要因に重点を置いていることである。… 社会音声学の研究は、社会言語学の他の多くの分野と同様、日常における音声や社会的文脈に埋め込まれた音声をその基礎としている。

また、Thomas (2019: 461) は、社会音声学によって、変異の指標性、すなわち変異形を誰が使うか、またそれを使う文脈について人々は何を「知って」いるのかという問題に認知的視点から取り組

む可能性を論じている。言い換えれば、社会音声学は、日常の場面における音声・音響面の特徴を人びとはどのようにとらえ、スタイル構築において利用することで何を伝えるのかという点から「社会」を描き出すことになる。第三の波との関連で言えば、どのような音声信号を操作して社会的意味を伝えるのかという点が主たる関心である。

3.1 声質の研究

近年は微細な音響特徴である声質にも社会音声学的研究の関心が広がっている。声質については、これまで音声学や音声情報処理 (speech information processing) などの研究者によって多くの貢献がなされてきたが、日本語の声質を社会音声学的に取り上げたものはまだそれほど多くない。

声質 (voice quality) とは、発声器官の形状から生じる人の声の長期的特性であり (Podesva 2007; Esling et al. 2019), 広い意味では「音声波から知覚される韻質 (phonemic quality) 以外の聴覚上の特質」を指す (森ほか2014: 135)。前川・西川 (2019) によれば、声質は話者に固有の音声的特徴ではあるが、特定の言語共同体における個人話者たちに安定して観察されるものである。つまり、言語共同体内においては、その音響的特性からある聴覚的な印象を与える声のタイプが存在すると考えられる。言い換えれば、音声器官の個人差のように生まれながらのものだけでなく、発声様式や調音運動の違いなども含めて言語共同体内で後天的に獲得される声のタイプとしての声質もあるということである。森ほか (2014) は、声質によって伝えられるものには、パラ言語情報 (話し手の意図や態度を伝えるもの)、心理状態情報、個人性情報の3つを上げている。話者のアイデンティティ構築に関わるスタイル実践に関心をおく社会言語学の研究では、個人性情報に見られる音響的特性がおもな研究の対象となる。発声そのものは話し手の身体的特徴から生じる生理的条件によって制約を受けるが、ピッチレンジや氣息性など、声質の特徴には、話し手がある程度操作できるものもある (Podesva & Kajino 2014)。

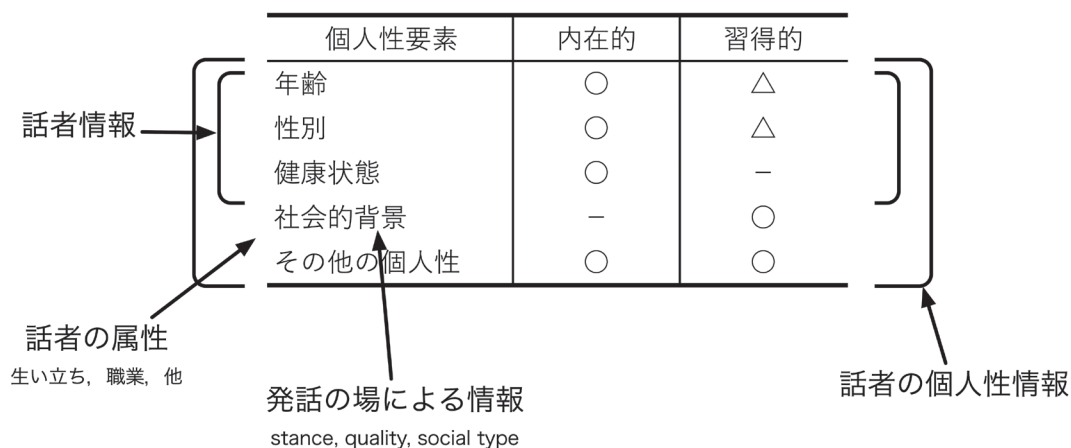


図1. 個人性要素と内在的／習得的との対応関係 (森ほか2014: 138)

(著者による改変)

図1に示すように、森ほかは話者の個人性情報を構成する要素として、「年齢」、「性別」、「健康状態」、「社会的背景」、「その他の話者情報」の5つを挙げている。「話者情報」として示されるものは、基本的には話者個人の特性に内在するものである。「年齢」はおおよその場合、子ども、成人、老人のように話し方を含めた話者の声のあり方と関連する。話者に期待される「年相応」のふるまいとして習得されるものである。「健康状態」は嗄声 (hoarseness) のような病状を示す特徴となって知覚されることがある。「性別」はセクシャリティの多様性を考えればそれほど簡単に分類できるものではないかもしれないが、多くの場合は個人話者の情報としては有用であり、またジェンダー・アイデンティティを反映するふるまいは習得的なものと考えられる。一方「社会的背景」は、生い立ちや職業などの話者の属性であり、個人の身体的特徴ではなく言語共同体における特定の声質の存在と関わりで習得されていくものである。最後の「その他の個人性」は、身体的特徴や個人の発声の癖などによる声の特徴を指す。

このように、声質はさまざまなレベルで個人話者の情報を含んでいるが、その社会的意味は、具体的な発話の場での声質の音響的特徴により *stance*, *quality*, *social type* などとして指標される (Eckert 2008)。そして、社会音声学の声質研究は、まさにこの社会的意味を生み出す音響的特徴に「社会」をとらえる手がかりを求めることになる。

日本語に関する研究で、声質が何らかの社会的意味を表すことに関するものは、Teshigawara (2003) のアニメの善玉と悪役の声、Kawahara (2016) の秋葉原のメイドの声などがある。ただ、これらは声のステレオタイプの研究ではあるが、個人話者の日常場面でのスタイル構築のような社会言語学的な関心からのものとはやや異なる。一方、Starr (2015) が Sweet Voice と呼ぶアナウンスやアニメのなめらかな女性の声、Kajino (2014) の地域のステレオタイプの声の特徴を利用した若い女性のジェンダー・アイデンティティの構築、Utsugi et al. (2019), I.Ota et al. (2021), Matsuda et al. (2023) による社会文化的な声の型 (レジスター) としてのアニメの声の研究などは、日常の社会や文化の文脈において声質にまつわる問題をとらえようとする方向性を有しており、社会音声学の研究としての性格を強く持つものと言える。

Starr は、アニメやアナウンスなどの特徴的な発声スタイルである Sweet Voice が、「言語スタイルの構築におけるオーセンティシティの指標」(Starr 2015: 1) としてはたらく社会語用論的な機能を、10人の声優の母音/a/の音響特性 (H1-H2, 2k-4k, CPP, HNR, F0) の分析から論じている。Starr の考察からは、Sweetに聞こえる声質は、いわゆる「女ことば (Japanese women's language)」(中村 2021) のような他の言語形式と併用されることで、女性的なジェンダーパフォーマンスにオーセンティティをもたらす文化的カテゴリーであることが示される (Starr 2015: 20)。

Kajino は、三大都市圏 (東京、京都、大阪) の若い女性47名が音声的特徴の使用において顕著な違いを見せることを示し、話者たちが「地域のステレオタイプと折り合いをつけながら特定の地域を体現するジェンダー像を作り出す」(Kajino 2014: 254) ことを論証している。声の息漏れ性と他の音声的特徴 (F0, ピッチレンジ, 発話速度, イントネーションフレーズの末尾の長さ) の地域間・地域内の音声的特徴の使用パターンを詳細に検討することで、若い女性が社会実践において特定の言語スタイルを採用して自らが望むジェンダーの姿を表わそうとすることをKajinoは示している。

このように、StarrやKajinoの研究は、声質の社会的意味が広く認識・共有され、ジェンダー・イデオロギーという社会文化的背景のもとで話者のスタイルが構築されているという証拠を示している。言語やジェンダー、またその他の社会文化に関するイデオロギーが変化しても、声質として感じられる音声の特徴は何らかの意味を伝える指標となり得る。メディアにおいても現実の日常生活においても、特定の発声が繰り返し使われることで、特定の人物像を指標する声のオーセンティシティは確立される (Matsuda et al. 2023)。

3.2 アニメの声の問題

声優が吹き替えるアニメの声は、「アニメ声」とも呼ばれるように広く認識される声のタイプであり、F0、音域、イントネーション、発話速度、声色などの音声の特殊性によって喚起される独特の聴覚イメージを持つ (cf. 石井・伊藤 2019; 林 2019)。Agha (2005: 38)のことは借りれば、「特徴的なことばの形式が、言語使用者の集団によって、話者の属性を指標するものとして社会的に認識 (レジスター化) されるようになる過程」を経て、人びとの「感覚」に内面化した社会文化的な制度とみることが可能である (Matsuda et al. 2023)。Utsugi et al. (2019), I.Ota et al. (2019, 2021), Ishii et al. (2023)などの一連の研究は、「アニメの声とはどのような声か」(金水2021) という問いに答えるものである。具体的には、アニメの音響特性、一般人の声との音響的な相違、キャラクターごとの音響的特徴などをあきらかにすることで、メディアテキストにおける社会文化的なかたちとしてのアニメの声をとらえることを試みている。社会音声学的に言えば、アニメというメディア作品に反映される「社会」の姿を、声質という言語特徴とそれにまつわる言語やジェンダーのイデオロギーおよび人びとの意識等との関連によって描き出す試みである。

I.Ota et al. (2021), Matsuda et al. (2023)では、20代前半の声優コースの女子学生11名の声の演技で音声データを収集し、その音響特徴を分析している。その結果、ピッチや音量だけでなく、息漏れの度合やスペクトル傾斜に関わる特徴などもコントロールして、学生たちは演じるキャラクターごとに異なる女性像を対照的に表現していることが報告されている。キャラクターの演じ分けが声質の音響特徴の組み合わせによって行われるということは、キャラクターのタイプと声質に一定の対応関係があるためと考えられる。しかしながら注意すべきは、キャラクターのタイプと声質の関係はいつどのようなときでも同じ社会的意味を指標しているとは限らないということである。スタイルやレジスターとして認識されることばの型を通して行われる記号の活動は、現在の (あるいは変化する) 言語イデオロギーと強く関連している。イデオロギーの変化は言語使用を取り巻く社会的な状況を変化させ、その結果としてコミュニケーションの状況における個人の相対的な位置づけが変化し、個人と社会とのつながりも常に形を変えて上書きされていく。社会的意味はこの絶え間ない変化によって継続的に生み出されていくものである (Ota and Takano, forthcoming; D'Onofrio 2021)。社会音声学には、このようなイデオロギーの変化を取り込みながら理論構築が可能なモデルが求められる。²

² 声の文化をとらえるモデル構築の手がかりは、太田純貴 (2019) で論じられている。

以上述べたように, I.Ota et al. (2021)などのアニメの声質の研究は, 音響特徴が生み出す社会的意味に「社会」を求めている。しかしながら, これらは今のところ音声の産出(production)に焦点を絞った研究である。特徴的な音響特性がどのように解釈されるかについては, Starr (2015) はアニメのファンサイトに見られるコメント, Kajino (2014) は調査時の話者へのインタビューと話者本人や一般の人びとから得たメタ語用論的情報を論証の支えとしている。これらの議論には一定の説得性はあると思われるが, 音声がかたばと社会の関係を表すものとして受容されている様子を細かくとらえるには, より精密な理論モデルを仮定し, 聴取反応実験等により知覚面での裏付けが求められる (cf. Thomas 2019)。

4. 認知を組み込んだ理論枠組みによる「社会」

音声変異に反映される社会は, 知覚面からはどのようにとらえることができるだろうか。聴知覚のプロセスについて, 森ほか (2014: 132) は次のように述べる。

(話者の) 個人性情報の獲得に関わる聴知覚は, ボトムアップ的で受動的な過程であるというよりは, 聞き手の体験に裏付けられた知識が反映された能動的な過程である。

つまり, われわれが聴覚情報に何らかの判断を下すのは, 発話の体験の記憶へのアクセスによって支えられているということである。問題はこのことが変異による記号活動やそれを支える指標性とどのように関連付けられるかという点にある (Eckert 2019, D'Onofrio and Eckert 2021, Ota and Takano, forthcoming)。この問題に答えるために, Thomas (2019: 460) は, Connie and Pinnow (2006), Pierrehumbert (2006), Summer et al. (2014) らの議論に依拠して, 音声信号処理のハイブリッドモデルを提案している (図2)。

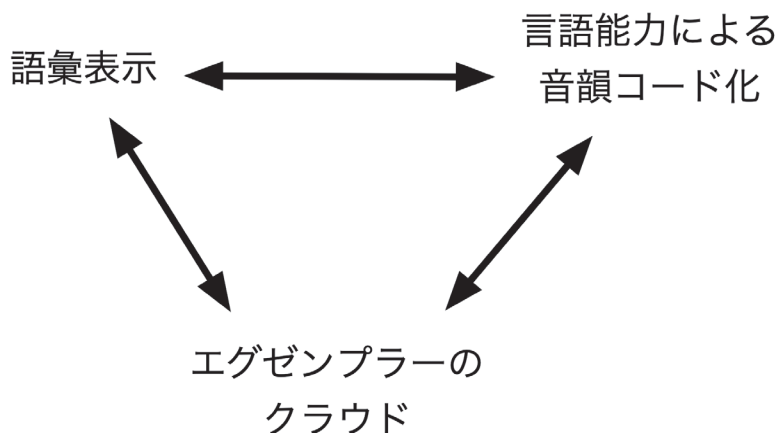


図2. 音声信号処理のハイブリッドモデル (Thomas 2019: 460)

(著者による簡略化)

このモデルは相互に関連し合う三つの部分から構成されている。「語彙表示」は、個人話者がこれまでに出会ったある語に関する数多くの経験から要約された当該の語の「本質的で抽象的な構造」を表すものである (Whittlesea 1997)。「エグゼンプラーのクラウド」は、多数の個々のエグゼンプラーによって構成されている。エグゼンプラーは具体的に記憶された言語経験 (エピソード) である。話者の知識は、「ある音 (または単語) に何度も接することで構築され、それぞれの接し方の詳細な社会的・言語的痕跡を含むいわゆるエグゼンプラーのクラウドに整理される」 (Kendall and Firdland 2021: 163)。「音韻コード化」は聞いた音のカテゴリーの異同 (同じ/別の音素か、異音か) を判断する言語能力の一部である。

このモデルは、抽象的な言語処理だけではなく、個人の言語経験のエピソードが文脈やことばのかたちとともに保持され、すべての情報が認知的にリンクされていると仮定することで、社会的情報を指標するメカニズムもその中に取り込むことができる。エグゼンプラーには、誰が・いつ・どんな状況でそれを発したかという情報が包含されており、聴知覚のさいだけでなく、発話の産出においても参照されることで、スタイル実践において「社会」を表出させる。このように「社会」は、個々のエピソードと結びつくかたちで話者たちの「話すこと」の中に表現されているが、知覚も産出も常に一定というわけではない。さまざまな状況で使用される形式に話者たちがさらされるうちに、個人話者 (たち) の知識のなかで、エグゼンプラーの「価値」がシフトすることもありうる。移り変わる社会的風景のなかで出会う具体的な言語使用の例 (エグゼンプラー) を通して、話者たちはそこに現れる社会状況を少しずつ自分自身の中に取り込み、また話すことを通して自ら社会を作り変えていく。アニメの声質が表す「社会」は、フィクションであり現実のものではないが、メディア・テキストに映し出される「現実の反映」である。視聴者は、言語イデオロギーとエグゼンプラーを手がかりにして、メディアテキストのなかの社会を知り、現実の日常にある社会をあらためて見つめ直すことになる。

5. おわりに：「社会言語学的変化」という視点

最後にもう一度、言語変異研究の出発点となった言語変化の問題に立ち返って「社会」の問題を考えてみる。言語学においては、「ことばが変わる」ことは言語構造の変化 (いわゆる言語変化) と見なされてきた (現在も多くの場合そう思われている)。変異理論の第一の波において「社会」を表すと仮定された社会カテゴリーでは、社会の (変化の) 実態が言語変化の説明に十分に反映されていないということは先に述べた。一方、第二、第三の波の社会言語学は、話者の日々の実践をとらえて社会と言語の関係をとらえることを試みて理論的進展を遂げた。「社会」は具体的な個人話者の言語実践において表出し、またそれはその背後にある言語イデオロギーと強く関連している。このような視点で言語と社会の変化を包括して語る枠組みは、2010年前後から「社会言語学的変化 (sociolinguistic change)」という概念として提示されてきた (Androutsopoulos 2014)。

社会言語学的変化とは、広い意味では、言語と社会の関係において時間の経過に伴う結果として生じる変化と定義される (Coupland 2016: 433)。Coupland (2009: 36) によれば、その変化の核となるプロセスは「言語の変化ではなく、より広範な社会変化のプロセスに組み込まれた言語イデオロギー

の変化」である。³ ことばに対する評価や意識を反映するイデオロギーの変化は、個々の言語実践に反映され、人びとのあいだで次第に受容されて広まっていく。このようにして、話すこと（言語実践）の変化は社会の変化の中に組み込まれ、その結果、構造的変化である言語変化は、言語に対する信念や評価の変化と関連づけて再概念化される(Maegaard 2020: 2)。社会言語学的変化の研究は、言語実践の変化や言語イデオロギーの変化を通じて、また何らかのかたちで言語との関わりをもって、「社会」とその変化の様相がどのようにもたらされるかをあきらかにしようとする試みである(Coupland 2016: 435)。

上述の認知論的言語処理のモデルにおいては、言語実践とその背後の言語イデオロギーは、エグゼンプラーが個人話者の知識に具体的にどのように存在しているかを探ることで追求される。すなわち、ある時点での個人の知識内のエグゼンプラークラウドはどのような状態か（どのエグゼンプラーが顕著で、どれがそうでないか）、それはどのような言語イデオロギーと関連しているか、その結果どのようなスタイル実践が行われたか、などの問題を産出と知覚の両面から検討することになる。社会言語学的変化という枠組みでみれば、スタイルの実践による話者の周囲の状況・環境との交渉を通して、話者のなかに内在化された「社会」は「話すこと（言語実践）」の音声にどのように反映されるのか、また「社会」の変化は「話すこと」と関連してどのような様相を見せるのか、そしてその結果としてどのような構造的変化が言語に生じたかなどの問題に答えていくことが、今後の社会言語学、社会音声学の重要な課題である。

謝辞

本稿は、2022年9月3日にオンライン開催された第4回社会言語科学会シンポジウム「プロソディを通して見る社会とコミュニケーション」での著者（太田一郎）による話題提供の内容に、大幅な加筆修正を施したものである。本稿執筆と研究の遂行に、さまざまなサポートをいただいた次の方々に感謝申し上げる。

高野照司、宇都木昭、太田純貴、菅野康太、石井カルロス寿憲、王瀚、松田謙次郎、朝日祥之、小磯花絵、洗足学園音楽大学声優アニメソングコース

本研究はJSPS 科研費17K18485および21K18116の支援を受けて遂行した。

参考文献

（日本語文献）

石井沙季, 伊藤克亘. 2019. キャラクター音声のステレオタイプ識別のための音響分析. 『第81回全国大会講演論文集 2019 (1)』, 695-696.

太田純貴. 2019. 「アニメ・身体・声についての覚書」『人文学科論集』(86), 17-27. 鹿児島大学法文学部

³ Coupland (2009)の原典が入手できなかったため、Maegaard (2020: 2)を参照した。

- 尾辻恵美. 2016. 「メトロリンガリズムとアイデンティティ：複数同時活動と場のレパトリーの視点から」『ことばと社会』18, 11-34. 三元社
- 金水敏. 2021. 「ポピュラーカルチャーのことば」『日本語学』vol. 40-1, 4-13. 明治書院
- 高野照司. 2012a. 「時間からことばの変化をさぐる」. 日比谷潤子（編著）『はじめて学ぶ社会言語学－ことばのバリエーションを考える14章－』, 32-53. ミネルヴァ書房
- 高野照司. 2012b. 「ことばのスタイルを理解し応用する」. 日比谷潤子（編著）『はじめて学ぶ社会言語学－ことばのバリエーションを考える14章－』, 248-269. ミネルヴァ書房
- 中村桃子. 2021. 『「自分らしさ」と日本語』. ちくまプリマー新書
- 林大輔. 2019. 声優のキャラクター演技音声を用いた音声知覚に関する実験研究. 『愛知淑徳大学論集－人間情報学部篇』9, 49-62.
- 前川喜久雄, 西川賢哉. 2019. 『日本語話し言葉コーパス』への声質情報付与と予備的分析. 『言語資源活用ワークショップ発表論文集』, 205-221. 国立国語研究所
- 森大毅, 前川喜久雄, 粕谷英樹. 2014. 『音声は何を伝えているか－感情・パラ言語情報・個人性の音声科学－』 コロナ社

(英語文献)

- Agha, Asif. 2005. Voice, footing, enregisterment, *Journal of Linguistic Anthropology* 15(1), 38-59.
- Androutsopoulos, Jannis. 2014. Mediatization and sociolinguistic change. Key concepts, research traditions, open issues. In Jannis Androutsopoulos (ed.), *Mediatization and Sociolinguistic Change*, 3-48. Berlin: De Gruyter.
- Bell, Allan. (1984). Language style as audience design. *Language in Society* 13, 145-204.
- Chambers, J.K. 2003. *Sociolinguistic Theory*. Oxford: Blackwell.
- Cheshire, Jenny. 1982. *Variation in an English Dialect: A Sociolinguistic Study*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Connine, Cynthia M. and Eleni Pinnow. 2006. Phonological variation in spoken word recognition: Episodes and abstractions. *The Linguistic Review* 23, 235-245.
- Coupland, Nikolas. 2009. Dialects, standards and social change. In Marie Maegaard, Frans Gregersen, Pia Quist and Jens Normann Jørgensen (eds.), *Language Attitudes, Standardization and Language Change*, 27-50. Oslo: Novus.
- Coupland, Nikolas. 2016. *Sociolinguistics: Theoretical Debates*. Cambridge: Cambridge University Press.
- D'Onofrio, Annette. 2021. Sociolinguistic signs as cognitive representations. *Social Meaning in Linguistic Variation: Theorizing*. In Lauren Hall-Lew, Emma Moore, and Robert J. Podesva (eds.), *Social Meaning and Linguistic Variation: Theorizing the Third Wave*, 153-175. Cambridge: Cambridge University Press.
- D'Onofrio, Annette, and Penelope Eckert. 2021. Affect and iconicity in phonological variation. *Language In Society* 50(1), 29-51.

- Eckert, Penelope. 1989. The whole woman: Sex and gender differences in variation. *Language Variation and Change* 1(3), 245-267.
- Eckert, Penelope. 2008. Variation and the indexical field. *Journal of Sociolinguistics* 12(4): 453-76.
- Eckert, Penelope. 2012. Three waves of variation study: The emergence of meaning in the study of sociolinguistic variation. *Annual Review of Anthropology* 41, 87-100.
- Eckert, Penelope. 2016. Variation, meaning and social change. In Nikolas Coupland (ed.), *Sociolinguistics: Theoretical Debates*, 68-84. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eckert, Penelope. 2019. The limits of meaning: Social indexicality, variation, and the cline of interiority. *Language* 95(4), 751-776.
- Giles, Howard, and Nikolas Coupland (1991). *Language: Contexts and Consequences*. Pacific Grove, CA: Brooks/Cole.
- Hall-Lew, Lauren, Emma Moor, and Robert J. Podesva (eds.). 2021. *Social Meaning and Linguistic Variation: Theorizing the Third Wave*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ishii, Carlos Toshinori, Akira Utsugi, and Ichiro Ota. 2023. Voice types and voice quality in Japanese anime. Paper presented at ICPhS 2023.
- Kajino, Sakiko. 2014. *Sociophonetic Variation at the Intersection of Gender, Region, and Style in Japanese Female Speech*. PhD dissertation, Georgetown University.
- Kawahara, Shigeto. 2016. The prosodic features of the “moe” and “tsun” voices. *Journal of the Phonetic Society of Japan* 20 (2), 102–110.
- Kendall, Tyler and Valerie Fridland. 2021. *Sociophonetics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Labov, William. 1972a. *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University Pennsylvania Press.
- Labov, William. 1972b. *Language in the Inner City*. Philadelphia: University Pennsylvania Press.
- Maagaard, Marie. 2020. Introduction: Standardization as sociolinguistic change. In Maagaard, Marie, Malene Monka, Kristine Køhler, and Andreas Candefors Stæhr (eds.), *Standardization as Sociolinguistic Change*. New York: Routledge.
- Matsuda, Kenjiro, Shoji Takano, Yoshiyuki Asahi, and Ichiro Ota. 2023. Sociophonetics and Japanese. In Christopher Strelluf (ed.), *The Routledge handbook of sociophonetics*, 512-539. London: Routledge.
- Milroy, Lesley. 1980. *Language and Social Networks*. Oxford: Blackwell.
- Milroy, Lesley. 1986. *Observing and Analysing Natural Language*. Oxford: Blackwell.
- Milroy, Lesley, and Matthew Gordon. 2003. *Sociolinguistics*. Oxford: Blackwell.
- Ota, Ichiro, Akira Utsugi, and Yoshitaka Ota. 2019. Sociolinguistic situations of anime voice in Japanese pop culture. Paper presented at Language in the Media 2019.
- Ota, Ichiro, Akira Utsugi, and Yoshitaka Ota. 2021. Voice quality as a sociocultural register. Paper presented at the 16th EAJS Conference.
- Ota, Ichiro and Shoji Takano. forthcoming. Sociolinguistic variation in style and register.
- Pierrehumbert, Janet B. 2006. The next toolkit. *Journal of Phonetics* 34, 516–530.

- Podesva, Robert J. and Sakiko Kajino. 2014. Sociophonetics, gender, and sexuality. In Susan Ehrlich, Miriam Meyerhoff and Janet Holmes (eds.), *The Handbook of Language, Gender, and Sexuality*, 103–122. Oxford: Wiley Blackwell.
- Sumner, Meghan, Seung Kyung Kim, Ed King, and Kevin B. McGowan. 2014. The socially weighted encoding of spoken words: A dual-route approach to speech perception. *Frontiers in Psychology* 4, 1–13.
- Starr, Rebecca Lurie. 2015. Sweet voice: The role of voice quality in a Japanese female style. *Language in Society* 44, 1–34.
- Starr, Rebecca Lurie. 2021. Changing language, changing character. In Lauren Hall-Lew, Emma Moore, and Robert J. Podesva (eds.), *Social Meaning and Linguistic Variation: Theorizing the Third Wave*, 315–337. Cambridge: Cambridge University Press.
- Teshigawara, Mihoko. 2003. *Voices in Japanese animation*. PhD dissertation, University of Victoria.
- Thomas, Erik R. 2019. Innovations in sociophonetics. In William F. Katz and Peter F. Assmann (eds.), *The Routledge Handbook of Phonetics*, 448–472. London: Routledge.
- Utsugi, Akira, Han Wang and Ichiro Ota. 2019. A voice quality analysis of Japanese anime. Paper presented at ICPHS 2019.
- Weinreich, Uriel, William Labov, and Marvin Herzog. 1968. Empirical foundations for a theory of linguistic change. In Winfred P. Lehmann and Yajov Malkiel (eds.), *Directions for Historical Linguistics: A Symposium*, 95–188. Austin: University of Texas Press.
- Whittlesea, Bruce. W. A. 1997. Production, evaluation, and preservation of experiences: Constructive processing in remembering and performance tasks. In Douglas. L. Medin (ed.), *The Psychology of Learning and Motivation: Advances in Research and Theory* 37, 211–264. Cambridge, MASS: Academic Press.